

英語ⅡB Reading 各章の要約（まとめ）

第5章 意味の変化

言語において語彙項目は変化していつている。その語彙項目が意味において変化する際、3つのパターンがあげられる。広義化、狭義化、意味の転化である。

《広義化》

単語がより広い意味を持つようになるとき、
(今まで持っていた意味) + (新たな意味)
となるパターン

《狭義化》

元々意味していた意味がさらに限定的なものを意味するようになったなど、意味の範囲が狭まるパターン
(例)

昔”meat”は食べ物全体を意味していた

《意味の転化》

時代背景、習慣など様々な要因が影響して、元々の意味から大きく移り変わっていくパターン
(例)

“knight” 「若さ」 → 「騎士」

第6章 文体

言語には様々な文体がある。文体の選択によって表現形式を変えて同じ意味を表す、つまり言い換えをしてやることができる。言い換え表現の例として次のようなものが挙げられる。

- (1) 単語の順番を変えても同じ意味を持つ場合
- (2) 構造的、語形的に違った文法、機能語などに変えてやる場合
- (3) すでに知っている情報や、簡単に推測できる単語を繰り返さずに省略する場合（同一要素の削除）
- (4) 代名詞などの代用形を用いる場合

このような言い換え表現を我々が理解できるのは言語に関する知識を持っているからなのである。

第7章 話し言葉と書き言葉

文章において、その構造を示してやるときにクエスチョンマーク、カンマ、イタリック体など様々な句読法が使われたりする。これらの句読法を使ってやることで文章の意味の曖昧さをなくしてやったり、筆者の意図を示してやったりすることができる。一方口語においてはこれらの句読法は間やイントネーションとして反映されている。大体の文章は口語に反映してやることができるが例外的に無理な場合もある。そのようなとき口語では「強勢」、すなわち強い口調で言ったりして強調を使い分けることにより文章の曖昧性をなくしてやることのできるのだ。

第8章 発話行為と語用論

発話には行為が伴っていたりする。例えば賭けをしたり警告をしたりするのは全部発話によって行われる動作だ。これらの動詞は遂行動詞である。実はこのような遂行動詞を含んでいないものを含めてあらゆる発言はある種の発話行為なのである。つまり我々は発話によって行動を起こしているのだ。

発話には文脈というものが大事である。その文脈によって発言の意図、行動内容が変わってしまうからだ。どのように文脈が、我々が文章を解釈する際に影響を及ぼしてくるのかということの研究が語用論である。話者というのはたいていある前提のもとで発言するものである。例えば「もう一杯ビールはいかがですか」という発言は、相手がもうすでに一杯以上ビールを飲んでいることが前提となっていることは容易に想像がつくでしょう。

第9章 方言の一面

二種類の言語共同体間の違いというのは、それらが方言のような違いを持っているのか、もしくは全く別の言語であるのか、これを判断するのは容易なことではない。方言に関しては様々な定義がなされている中確かにいえる定義は、どんな言語共同体においてもあらゆる要因を経て言語というのは構造的に変化していつているということである。「なまり」というのは話者の方言についての情報を伝えていたりする。どこ出身であるかとか、どんな言語共同体に属しているかというようなことだ。また「なまり」というのはネイティブではない発音を言及するときにも

使われるものである。方言を区別する際、文法的な違いであったり、文法上省略が可能だったりと様々な違いを持っているだろうしかしながら我々はそのような方言を理解することは可能である。例え関西人であっても九州弁の人の言っていることは分かるだろう。これは大部分の語彙や、意味関係などは共有されているためであり、方言というのは相互理解可能なのである。

第10章 言語と性差別

例えば「私の隣人は金髪で色白である」と言われたとすると、話者は女性のことを言及していると多くの人が思うだろう。ある言語学者はこのことについて、女性は性の対象であり身体的特徴が重要視されているという事実により引き起こされているものだといっている。男性が女性を言及する際、軽蔑的であったり性的な意味合いを含む言葉が使われていたりするのだ。

女性を指示する言葉に関して、男性を示す言葉に拘束形態素を付け加えたり複合したりして作られたりすることがよくある。

(例)

Prince (王子) →Princess (王女)

女性を言及する言葉の中に軽蔑的な言外の意味が含まれるというのは社会における女性の見方というのを反映しているのではないだろうか。性差別主義者は言語ではなく社会自身なのである。